

平成25年度採択プログラム 事後評価調査

博士課程教育リーディングプログラム プログラムの概要 [公表。ただし、項目13については非公表]

機関名	東京大学	整理番号	S01
1. 全体責任者 (学長)	※共同実施のプログラムの場合は、全ての構成大学の学長について記入し、取りまとめを行っている大学(連合大学院によるもの場合は基幹大学)の学長名に下線を引いてください。 (ふりがな) ごのかみ まこと 氏名・職名 五神 真・東京大学総長		
2. プログラム責任者	(ふりがな) おおた くにひろ 氏名・職名 太田 邦史 大学院総合文化研究科・研究科長 (平成31年4月1日変更)		
3. プログラム コーディネーター	(ふりがな) たかはし ひでみ 氏名・職名 高橋 英海 大学院総合文化研究科・地域文化研究専攻・教授 (平成31年4月1日変更)		
4. 類型	S<複合領域型(多文化共生社会)>		
5.	プログラム名称	多文化共生・統合人間学プログラム	
	英語名称	Intergrated Human Sciences Program for Cultural Diversity	
	副題		
6. 授与する博士学位分野・名称	博士(学術)・(学際情報学)・(統合人間学)		
7. 主要分科	(① 哲学) (② 社会学) (③ 科学社会学・科学技術史) ※ 複合領域型は太枠に主要な分科を記入		
	地域研究、環境創成学、人間情報学、情報学フロンティア、ジェンダー、科学教育・教育工学、文学、史学、芸術学、社会・安全システム科学、言語学、文化人類学、脳科学、基礎化学、心理学、政治学、人文地理、文化人類学		
8. 主要細目	(①) (②) (③) ※ オンリーワン型は太枠に主要な細目を記入		
	哲学・倫理学、中国哲学・印度哲学・仏教学、宗教学、思想史、史学一般、ヨーロッパ史・アメリカ史、日本史、アジア史・アフリカ史、社会学、科学社会学・科学技術史、日本文学、英米・英語圏文学、ヨーロッパ文学、認知科学、生命・健康・医療情報学、ウェブ情報学・サービス情報学、自然共生システム、持続可能システム、環境政策・環境社会システム、社会システム工学・安全システム、生命倫理学		
9. 専攻等名 (主たる専攻等がある場合は下線を引いてください。)	大学院総合文化研究科超域文化科学専攻・言語情報科学専攻・地域文化研究専攻、国際社会科学専攻・広域科学専攻、大学院学際情報学府学際情報学専攻		
10. 共同教育課程を設置している場合の共同実施機関名			
11. 連合大学院として参画している場合の共同実施機関名			
12. 連携先機関名(他の大学等と連携した取組の場合の機関名、研究科専攻等名)			

14. プログラム担当者の構成 計 77 名					
外国人の人数	21 人	[27 %]	女性の人数	10 人	[13 %]
プログラム実施大学に属する者の割合 [71 %]					
プログラム実施大学に属する者			55 人	プログラム実施大学以外に属する者	
そのうち、他大学等を経験したことのある者			46 人	そのうち、大学等以外に属する者	
15. プログラム担当者					
氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成31年度における役割)
(プログラム責任者) 太田 邦史 (H31.4.1変更)	オオタ ケニロ		大学院総合文化研究科・研究科長	分子生物学・構成生物学・理学博士	プログラム全体の責任者
(プログラムコーディネーター) 高橋 英海 (H31.4.1変更)	タカハシ ヒロミ		大学院総合文化研究科・地域文化研究専攻・教授	シリア語文献学、アラビア語文献学、西洋古典学・Dr.Phil	プログラム全体の運営。共生ユニット「中東・アフリカ」の責任者、教育プロジェクト「生命のポイエーシスと多文化共生のプラクシス」における研究・教育
武田 将明	タケダ マサキ		大学院総合文化研究科・言語情報科学専攻・准教授	イギリス文学・文芸批評 Ph.D. (English)	共生ユニット「価値・感性」、「日本」における研究・教育およびプログラムの運営
齋藤 希史	サイトウ マヒシ		大学院人文社会系研究科・アジア文化研究専攻・教授	中国古典文学・東アジア人文学 文学博士	共生ユニット「価値・感性」、「東アジア」における研究・教育およびプログラムの運営
三浦 篤	ミウラ アツシ		大学院総合文化研究科・超域文化科学専攻・教授	西洋美術史・共生のイメージ学 博士	共生ユニット「価値・感性」、「ヨーロッパ」における研究・教育およびプログラムの運営
長木 誠司	チノキ セイジ		大学院総合文化研究科・超域文化科学専攻・教授	音楽美学・現代音楽 博士 (音楽学)	共生ユニット「価値・感性」、「ヨーロッパ」における研究・教育およびプログラムの運営
大石 和欣	オオイシ カズヨシ		大学院総合文化研究科・言語情報科学専攻・教授	イギリス文学・社会史・哲学 博士 (D. Phil)	共生ユニット「価値・感性」の責任者、教育プロジェクト「生命のポイエーシスと多文化共生のプラクシス」における研究・教育およびプログラムの運営
桑田 光平	クワダ コウヘイ		大学院総合文化研究科・超域文化科学専攻・准教授	フランス文学・芸術 Ph.D.	共生ユニット「価値・感性」および教育プロジェクト「生命のポイエーシスと多文化共生のプラクシス」における研究・教育
村松 真理子	ムラマツ マリコ		大学院総合文化研究科・地域文化研究専攻・教授	イタリア文化 Ph.D 文学博士	共生ユニット「ヨーロッパ」の責任者、教育プロジェクト「生命のポイエーシスと多文化共生のプラクシス」における研究・教育、およびプログラムの運営
中島 隆博	ナカジマ タカヒロ		東洋文化研究所・教授	共生の哲学・中国哲学 博士 (学術)	共生ユニット「東アジア」、教育プロジェクト「生命のポイエーシスと多文化共生のプラクシス」における研究・教育およびプログラムの運営
林 少陽	リン ショウヨウ		大学院総合文化研究科・超域文化科学専攻・教授	日中近現代思想史、批評理論、哲学 Ph.D.	共生ユニット「東アジア」の責任者、および共生ユニット「日本」、教育プロジェクト「生命のポイエーシスと多文化共生のプラクシス」における研究・教育およびプログラムの運営
Lee Hyun-son	リ ヒョンソン		東洋文化研究所・准教授	社会学 Ph.D.	共生ユニット「東アジア」における研究・教育およびプログラムの運営
梶谷 真司	カジタニ シンジ		大学院総合文化研究科・超域文化科学専攻・教授	哲学・比較文化 博士 (人間・環境学)	共生ユニット「格差・人権」の責任者、および教育プロジェクト「生命のポイエーシスと多文化共生のプラクシス」における研究・教育とプログラムの運営
星加 良司	ホシカ リョウジ		大学院教育学研究科・附属バリアフリー教育開発研究センター・准教授	ディスアビリティの社会学 博士 (社会学)	共生ユニット「格差・人権」における研究・教育およびプログラムの運営
佐藤 安信	サトウ ヤスノブ		大学院総合文化研究科・地域文化研究専攻・教授	平和構築論・人間の安全保障研究、開発法学 法学博士、Ph.D in Law	共生ユニット「格差・人権」における研究・教育およびプログラムの運営
清水 晶子	シミス アキコ		大学院学際情報学府・学際情報学専攻・教授	フェミニズム・クィア理論 博士 (学術)	共生ユニット「格差・人権」、「日本」における研究・教育およびプログラムの運営
石井 剛	イシイ ツヨシ		大学院総合文化研究科・地域文化研究専攻・准教授	中国近代思想史・哲学 博士 (文学)	共生ユニット「格差・人権」、「東アジア」における研究・教育およびプログラムの運営

15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成31年度における役割)
瀬地山 角	セチヤマ カク		大学院総合文化研究科・国際社会科学専攻・教授	ジェンダー論・東アジア研究・社会学 博士(学術)	共生ユニット「格差・人権」、「東アジア」における研究・教育およびプログラムの運営
恒吉 僚子	ツネヨシ リョウコ		大学院教育学研究科・総合教育学専攻・教授	社会学、比較教育学・Ph. D.	共生ユニット「格差・人権」、「アメリカ・太平洋」における研究・教育およびプログラムの運営
石田 勇治	イシダ ユウジ		大学院総合文化研究科・地域文化研究専攻・教授	ドイツ近現代史・ジェノサイド研究 Ph. D.	共生ユニット「格差・人権」、「ヨーロッパ」における研究・教育およびプログラムの運営
園田 茂人	ソノダ シゲト		東洋文化研究所・教授	比較社会学、現代中国研究、アジア・グローバルゼーション研究 社会学修士	共生ユニット「移動・境界」の責任者、教育プロジェクト「Producing Multicultural Communities」の共同代表および研究・教育とプログラムの運営
佐藤 仁	サトウ ジン		東洋文化研究所・教授	資源論・国際開発論 博士(学術)	共生ユニット「移動・境界」、「東アジア」における研究・教育およびプログラムの運営
丸川 知雄	マルカワ トモオ		社会科学研究所・教授	中国経済・産業学 学士	共生ユニット「移動・境界」、「東アジア」における研究・教育およびプログラムの運営
羽田 正	ハネダ マサ		大学執行役・副学長	世界史 Ph. D.	共生ユニット「移動・境界」、「中東・アフリカ」における研究・教育およびプログラムの運営
林 香里	ハヤシ カオリ		大学院学際情報学府・学際情報学専攻・教授	マスメディア／ジャーナリズム研究 博士(社会情報学)	共生ユニット「情報・メディア」の責任者、教育プロジェクト「Producing Multicultural Communities」の共同代表および研究・教育とプログラムの運営
丹羽 美之	ニワ ヨシユキ		大学院学際情報学府・学際情報学専攻・准教授	メディア研究・ジャーナリズム研究 修士(人間科学)	共生ユニット「情報・メディア」における研究・教育およびプログラムの運営
吉見 俊哉	ヨシミ シュンヤ		大学院情報学環・学際情報学専攻・教授	社会学、カルチュラル・スタディーズ 社会学修士	共生ユニット「情報・メディア」における研究・教育およびプログラムの運営
田中 純	タナカ ジュン		大学院総合文化研究科・超域文化科学専攻・教授	表象文化論・思想史 博士(学術)	共生ユニット「情報・メディア」、「ヨーロッパ」における研究・教育およびプログラムの運営
Jason G. KARLIN	ジェイソン・G・カーリン		大学院学際情報学府・学際情報学専攻・准教授	ジェンダー論・メディア 博士(学術)	共生ユニット「情報・メディア」、「日本」における研究・教育およびプログラムの運営
エリス 俊子	エリス トシコ		大学院総合文化研究科・言語情報科学専攻・教授	比較文学・日本近代文学 Ph. D.	共生ユニット「日本」の責任者、教育プロジェクト「生命のポイエーシスと多文化共生のプラクティス」における研究・教育とプログラムの運営
矢口 祐人	ヤグチ ユウジン		大学院総合文化研究科・地域文化研究専攻・教授	アメリカ研究 Ph. D.	共生ユニット「アメリカ・太平洋」の責任者、教育プロジェクト「生命のポイエーシスと多文化共生のプラクティス」における研究・教育およびプログラムの運営
板津 木綿子	イタツ キウコ		大学院総合文化研究科・言語情報科学専攻・准教授	大衆文化交流史、日米文化交流史 Ph. D.	共生ユニット「アメリカ・太平洋」における研究・教育
道上 達男	ミチウエ タツオ		大学院総合文化研究科・広域科学専攻・教授	分子発生生物学・幹細胞生物学・理学 博士	共生ユニット「科学技術・社会」、教育プロジェクト「科学技術と共生社会」における研究・教育およびプログラムの運営
磯崎 行雄	イソザキ ユキオ		大学院総合文化研究科・広域科学専攻・教授	地球科学 理学博士	共生ユニット「科学技術・社会」における研究・教育およびプログラムの運営

15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成31年度における役割)
廣野 喜幸	ヒロノ ヨシキ		大学院総合文化研究科・広域科学専攻・教授	科学論・科学コミュニケーション論、環境/生命倫理学 理学博士	共生ユニット「科学技術・社会」における研究・教育およびプログラムの運営
藤垣 裕子	フジガキ ユウコ		大学院総合文化研究科・広域科学専攻・教授	科学技術社会論 博士(学術)	共生ユニット「科学技術・社会」における研究・教育およびプログラムの運営
松尾 基之	マツオ モトキ		大学院総合文化研究科・広域科学専攻・教授	環境分析化学・地球化学 理学博士	共生ユニット「科学技術・社会」における研究・教育およびプログラムの運営
石原 孝二	イシハラ コウジ		大学院総合文化研究科・広域科学専攻・准教授	科学技術哲学、現象学、当事者研究(障害の哲学) 博士(文学)	共生ユニット「科学技術・社会」における研究・教育およびプログラムの運営と教育プロジェクト「科学技術と共生社会」共同代表
村松 伸	ムラマツ シン		生産技術研究所・教授	建築史、都市環境リテラニイ学 工学博士	共生ユニット「科学技術・社会」、「東アジア」の研究・教育およびプログラムの運営
岡ノ谷 一夫	オカノヤ カズオ		大学院総合文化研究科・広域科学専攻・教授	神経生態学・言語起源論 博士 Ph. D.	共生ユニット「生命・環境」における研究・教育およびプログラムの運営
酒井 邦嘉	サカイ クニヨシ		大学院総合文化研究科・広域科学専攻・教授	言語脳科学 博士(理学)	共生ユニット「生命・環境」における研究・教育およびプログラムの運営
深代 千之	フカシロ セン		大学院総合文化研究科・広域科学専攻・教授	スポーツ科学 博士(教育学)	共生ユニット「生命・環境」における研究・教育およびプログラムの運営
増田 茂	マサダ シゲル		大学院総合文化研究科・広域科学専攻・教授	表面科学 理学博士	共生ユニット「生命・環境」における研究・教育および教育プロジェクト「科学技術と共生社会」共同代表とプログラムの運営
金子 邦彦	カネコ クニヒコ		大学院総合文化研究科・広域科学専攻・教授	複雑系物理・理論生物学 博士(理学)	共生ユニット「生命・環境」における研究・教育およびプログラムの運営
原 和之	ハラ カズユキ		大学院総合文化研究科・地域文化研究専攻・准教授	西洋思想史・精神分析 Ph. D. (哲学史)	共生ユニット「生命・環境」、「ヨーロッパ」における研究・教育およびプログラムの運営
森山 工	モリヤマ タカミ		副学長	文化人類学 博士(学術)	共生ユニット「生命・環境」、「中東・アフリカ」における研究・教育およびプログラムの運営
和田 毅	ワタ ケイ		大学院総合文化研究科・地域文化研究専攻・准教授	社会学・ラテンアメリカ地域研究 Ph. D.	共生ユニット「生命・環境」における研究・教育
池上 高志	イケガミ タカシ		大学院総合文化研究科・広域科学専攻・教授	複雑系・人工物理学 理学博士(物理学)	共生ユニット「生命・環境」における研究・教育
深津 晋	フカツ ススム		大学院総合文化研究科・広域科学専攻・教授	物性物理学、光物理学 博士(工学)	共生ユニット「生命・環境」における研究・教育
村田 滋	ムラタ シゲル		大学院総合文化研究科・広域科学専攻・教授	有機光化学 理学博士	共生ユニット「生命・環境」における研究・教育
村田 昌之	ムラタ マサユキ		大学院総合文化研究科・広域科学専攻・教授	分子細胞生物学、細胞工学 理学博士	共生ユニット「生命・環境」における研究・教育
渡邊 雄一郎	ワタナベ ユウイチロウ		大学院総合文化研究科・広域科学専攻・教授	植物環境応答学 理学博士	共生ユニット「生命・環境」の責任者、教育プロジェクト「科学技術と共生社会」の共同代表および研究・教育とプログラムの運営
大池 惣太郎	オオイケ ソウタロウ		大学院総合文化研究科・附属教養教育高度化機構・特任助教	フランス思想、表象文化論	教育プロジェクト「生命のポイエーシスと多文化共生のフラクシス」における教育の補助
林 意仁 (H30.4.1追加)	リン イレン		大学院総合文化研究科・附属教養教育高度化機構・特任助教	社会学	教育プロジェクト「Producing Multicultural Communities」における教育の補助
水野 恵子	ミズノ ケイコ		大学院総合文化研究科・附属教養教育高度化機構・特任助教	生物学、分子生物学 博士(理学)	教育プロジェクト「科学技術と共生社会」における教育の補助

15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成31年度における役割)
内野 儀	ウチノ タダシ		学習院女子大学・国際文化交流学部・教授	パフォーマンス研究、表象文化論・博士(学術)	共生ユニット「価値・感性」における研究・教育およびプログラムの運営
Martin Edward FACKLER	マーティン エドワード ファックラー		日本再建イニシアティブ・主任研究員兼ジャーナリスト・イン・レジデンス	mass communications, journalism MA history, MS journalism	共生ユニット「情報・メディア」における研究・教育およびプログラムの運営
C. J. Wee Wan-ling	C. J. ウェーワンリン		南洋工科大学(シンガポール)・人文社会学研究科・英文学専攻・准教授	East / Southeast Asian Studies, Contemporary Literature and the Arts, Cultural criticism Ph. D.	国際メンターズチームのメンバーとして教育、また共生ユニット「東アジア」における研究・教育
Michael H. H. Hsiao	マイケル H. H. シャオ		中央研究院(台湾)・社会学研究所・特聘研究員、所長	Sociology (Social Movement, Social Change) Ph. D.	国際メンターズチームのメンバーとして教育、また共生ユニット「東アジア」における研究・教育
In-Jin Yoon	インジン ユン		高麗大(韓国)・社会学科・教授	Sociology (International migration, multiculturalism) Ph. D.	国際メンターズチームのメンバーとして教育、また共生ユニット「東アジア」における研究・教育
張 政遠	チョウ セイエン		香港中文大学(香港)・文学部哲学研究室・講師	哲学博士	国際メンターズチームのメンバーとして教育、また共生ユニット「東アジア」における研究・教育
張 旭東	チョウ キョクトウ		ニューヨーク大学(アメリカ)・総合文化研究科・教授	East Asian Studies Ph. D.	国際メンターズチームのメンバーとして教育、また共生ユニット「東アジア」における研究・教育
白 永瑞	ペク ヨンソ		延世大学(韓国)・史学科・教授	中国近代学術史・東アジア論博士	国際メンターズチームのメンバーとして教育、また共生ユニット「東アジア」における研究・教育
Karen Shimakawa	カレン シマカワ		ニューヨーク大学(アメリカ)・総合文化研究科・パフォーマンス研究専攻・准教授	人文・社会融合・Ph. D.	国際メンターズチームのメンバーとして教育、また共生ユニット「アメリカ・太平洋」における研究・教育
石田 正人	イシダ マサト		ハワイ大学マノア校(アメリカ)・哲学部・准教授	比較思想・科学哲学 Ph. D.	国際メンターズチームのメンバーとして教育、また共生ユニット「アメリカ・太平洋」における研究・教育
Thomas P. Kasulis	トマス P. カスリス		オハイオ州立大学(アメリカ)・教養学部・比較文化学科・教授	Comparative Philosophy and Religion (area focus: Japanese and Western thought) B. A. M. A. Ph. D.	国際メンターズチームのメンバーとして教育、また共生ユニット「アメリカ・太平洋」における研究・教育
Prasentit Duara	プ ラゼット デ ヲラ		シンガポール国立大学(シンガポール)・アジア研究所・教授、所長、人文社会研究科長	Chinese history, Asian history, Social and historical theory Ph. D.	国際メンターズチームのメンバーとして教育、また共生ユニット「ヨーロッパ」における研究・教育
Marc A. Matten	マーク A. マッテン		フリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン=ニュルンベルク(ドイツ)・中国学科・教授	Modern Chinese History Ph. D.	国際メンターズチームのメンバーとして教育、また共生ユニット「ヨーロッパ」における研究・教育
Alain-Marc RIEU	アラン マルク リュー		ジャン・ムーラン・リヨン第3大学(フランス)・哲学科・教授	Contemporary philosophy, Science and technology studies Ph. D.	国際メンターズチームのメンバーとして教育、また共生ユニット「ヨーロッパ」における研究・教育
Thomas Fröhlich	トマス フレーリッヒ		フリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン=ニュルンベルク(ドイツ)・中国学科・教授	Chinese political thought, The history of ideas and modern China and Taiwan Ph. D.	国際メンターズチームのメンバーとして教育、また共生ユニット「ヨーロッパ」における研究・教育
Manfred Hettling	マンフレッド・ヘットリング		マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク(ドイツ)・歴史学科・教授	History of civic society; social and cultural history of war commemorations Ph. D.	国際メンターズチームのメンバーとして教育、また共生ユニット「ヨーロッパ」における研究・教育

15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成31年度における役割)
Ludovico V. Ciferri C.	ルドヴィコ V. チッフェリ C		Mario Boella 研究所 (イタリア) ・リサーチマネージャー	Mechanism of funding innovation, Clustering activity, International activities development, Metrics for assessments complex social phenomena M. Litt., ETP	国際メンターズチームのメンバーとして教育、また共生ユニット「ヨーロッパ」における研究・教育
Bertrand GUILLARME	ベルトラン キヤルム		パリ第8大学 (フランス) ・社会政治哲学科・教授	Political theory, ethics, applied ethics Ph. D.	国際メンターズチームのメンバーとして教育、また共生ユニット「ヨーロッパ」における研究・教育
Axel Schneider	アクセル シュナイダー		ゲッティンゲン大学 (ドイツ) ・近代東アジア研究センター・教授、センター長	History, History of Ideas and esp. History of Chinese Scholarship Ph. D.	国際メンターズチームのメンバーとして教育、また共生ユニット「ヨーロッパ」における研究・教育
永尾 英二郎	ナガオ エイジロウ		住友商事株式会社コモディティビジネス部・チーム長	リスク管理・学士	国際メンターズチームにおける教育、社会連携の促進
大沢 幸弘	オオサワ ユキヒロ		ドルビージャパン株式会社 代表取締役社長	ITおよび企業経営・学士	国際メンターズチームにおける教育、社会連携の促進
田上 英樹	タガミ エイキ		住友商事グローバルリサーチ (株) 産業部長	業界分析およびリスクマネジメント・学士	国際メンターズチームにおける教育、社会連携の促進

16. プログラムの応募学生数、合格者数及び履修生数

本プログラムの過去のリーディングプログラム応募学生数等について記入してください。

(各年度3月31日現在(ただし平成31年度は提出日現在))

		平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度 (2019) *(今後の募集予定: 有・無)
プログラム募集定員数		-	40	40	20	20	17	17
① 応募学生数		-	73	68	27	42	46	31
	うち留学生数	-	11	12	6	11	13	7
	うち自大学出身者数	-	(-) 44 (3)	39 (1)	10 (0)	12 (0)	12 (0)	5 (0)
	うち他大学出身者数	-	(-) 29 (8)	29 (11)	17 (6)	30 (11)	34 (13)	26 (7)
	うち社会人学生数	-	(-) 1 (0)	2 (1)	0 (0)	1 (0)	4 (0)	4 (0)
	うち女性数	-	(-) 32 (6)	35 (9)	12 (3)	15 (6)	21 (9)	16 (2)
② 合格者数		-	32	26	19	16	14	11
	うち留学生数	-	7	8	4	4	6	2
	うち自大学出身者数	-	(-) 21 (2)	13 (0)	8 (0)	6 (0)	3 (0)	0 (0)
	うち他大学出身者数	-	(-) 11 (5)	13 (8)	11 (4)	10 (4)	11 (6)	11 (2)
	うち社会人学生数	-	(-) 1 (0)	2 (1)	0 (0)	1 (0)	1 (0)	1 (0)
	うち女性数	-	(-) 18 (4)	19 (8)	8 (3)	6 (3)	9 (5)	7 (2)
③ のうち履修生数		-	31	24	19	16	14	10
	うち留学生数	-	7	8	4	4	6	2
	うち自大学出身者数	-	(-) 20 (2)	11 (0)	8 (0)	6 (0)	3 (0)	0 (0)
	うち他大学出身者数	-	(-) 11 (5)	13 (8)	11 (4)	10 (4)	11 (6)	10 (2)
	うち社会人学生数	-	(-) 1 (0)	1 (1)	0 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)
	うち女性数	-	(-) 17 (4)	17 (8)	8 (3)	6 (3)	9 (5)	6 (2)
プログラム合格倍率 (応募学生数/合格者数) (小数点第三位を四捨五入)		-	2.28倍	2.62倍	1.42倍	2.63倍	3.29倍	2.82倍
充足率 (合格者数/募集定員)		-	80%	65%	95%	80%	82%	65%

※留学生については、「うち留学生数」にカウントするとともに、うち自大学出身者数、うち他大学出身者数、うち社会人学生数、うち女性数の()に内数を記入してください。

※平成31年度*(今後の募集予定:有・無)については、平成31年度内に履修を開始する学生を募集予定の場合(秋入学等)は「有」に、募集予定がない場合は「無」に印を付けてください。

また、「有」の場合は、当該予定分については表中には含めず、備考欄へ募集時期及び募集予定人数を記入してください。

※編入学生がいる場合は、年度ごとの内訳を備考欄に記入してください。

リーダーを養成するプログラムの概要、特色、優位性

(広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダー養成の観点から、本プログラムの概要、特色、優位性を記入してください。)

【概要】

《**教育内容**》本学位プログラムは、**多文化共生社会という人類に課せられた重要なテーマ**に取り組む**次世代トップリーダー**を養成する。多文化共生の理念へのチャレンジを先導する人材に必要な学知は、学際的・複合領域的な**教養的学知**である。その教養とは、専門性を備えたうえでのさらに広い視座を持ち、新たな価値の創造を可能とする新しい教養であり、「**統合人間学**」と特徴づけられる。本学位プログラムは多文化共生社会の実現には「教養」が必要であると広く社会に提言する。

《**本プログラムで養成しようとする「リーダー像」**》以下の4つの力を有したリーダー育成が目標となる。(1)「**洞察力**」：多文化共生社会の課題を**微小な変化を見逃さずに検知**し、その**重要度を判断**する力、(2)「**統合力**」：コンフリクトの解消と共生理念の実現のために**臨機応変に対応**し、利用可能な**知識を総合する力**、(3)「**創造力**」：新たな価値を創出して次世代の社会的枠組みをアウトプットし、社会に「革新」をもたらす社会的構想力と、それを実現する**実行力**。(4)「**協働力**」：**卓越した国際的感覚**と**豊かなコミュニケーション能力**をもち、専門や立場を超えて**知の分散的協働**を可能とする力。

《**教育体制**》大学院**総合文化研究科**と**学際情報学府**を中心として、**東京大学の複数部局**(東洋文化研究所、生産技術研究所、教育学研究科、農学生命科学研究科、理学系研究科等)が関与する、東京大学全学に開かれた文理融合型の5年一貫の博士課程教育プログラムである。グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」等における大学院教育の実績を生かしつつ、国際的学際的大学院教育プログラムおよび学部生向け教育プログラムと連携し、学部-大学院を一貫した教育プログラムを提供する。また、社会人向けのエグゼクティブ・マネジメント・プログラム(東大EMP)と連携し、産業界・官界と学問界の流動的融合を実現させ、教育プログラムに反映させる。ニューヨーク大学、オクスフォード大学、フランス国立高等師範学校、北京大学、ソウル国立大学など、海外の優れた研究教育機関との単位相互認定制度を確立し、国際的環境で学生を教育する。また、本学位プログラムは外部評価として海外、産業界、官界、メディア、市民グループに諮問を行い、結果はプログラム運営に反映される。

【特色】

《**養成体制の特徴**》学部学生のための教育プログラムと協力し、**大学学部入学時から博士号**取得、さらにその後のキャリア形成まで、トータルな人材育成を目指す。英語、他の西欧語1ヶ国語、アジア地域言語1ヶ国語と、少なくとも合わせて**3つの外国語**に習熟した、豊かなコミュニケーション能力をもつグローバル人材を育成する。**社会人リカレント教育**を実施し、すでに企業等でリーダーとして活躍している人材も本プログラムにおいて統合人間学を修め、博士号を取得、社会に知を還元できる。プログラムの運営を円滑に遂行し、学生、プログラム担当者、国内海外連携機関をマネジメントする事務局機能を強化し、教育研究アドミニストレーターを配置する。**国際メンターズチーム**が学生をサポートし、学生各自が作成するプログラム・カルテを利用して学生各々にフィットしたオーダーメイドの教育が為される。

《**切磋琢磨させる環境の取り組みの特徴**》大学院1年目の早い時期から一貫して**国際的な環境**に身を置く研究現場教育を実施する。学生は在学期間中の**留学プログラム**を通じて国外の同世代の研究者と意見交換をすることで、高いレベルで研究へのモチベーションを保ち続けることができる。年度ごとに学生の研究成果を査定し、査定に応じた**研究奨励費**を支給する。

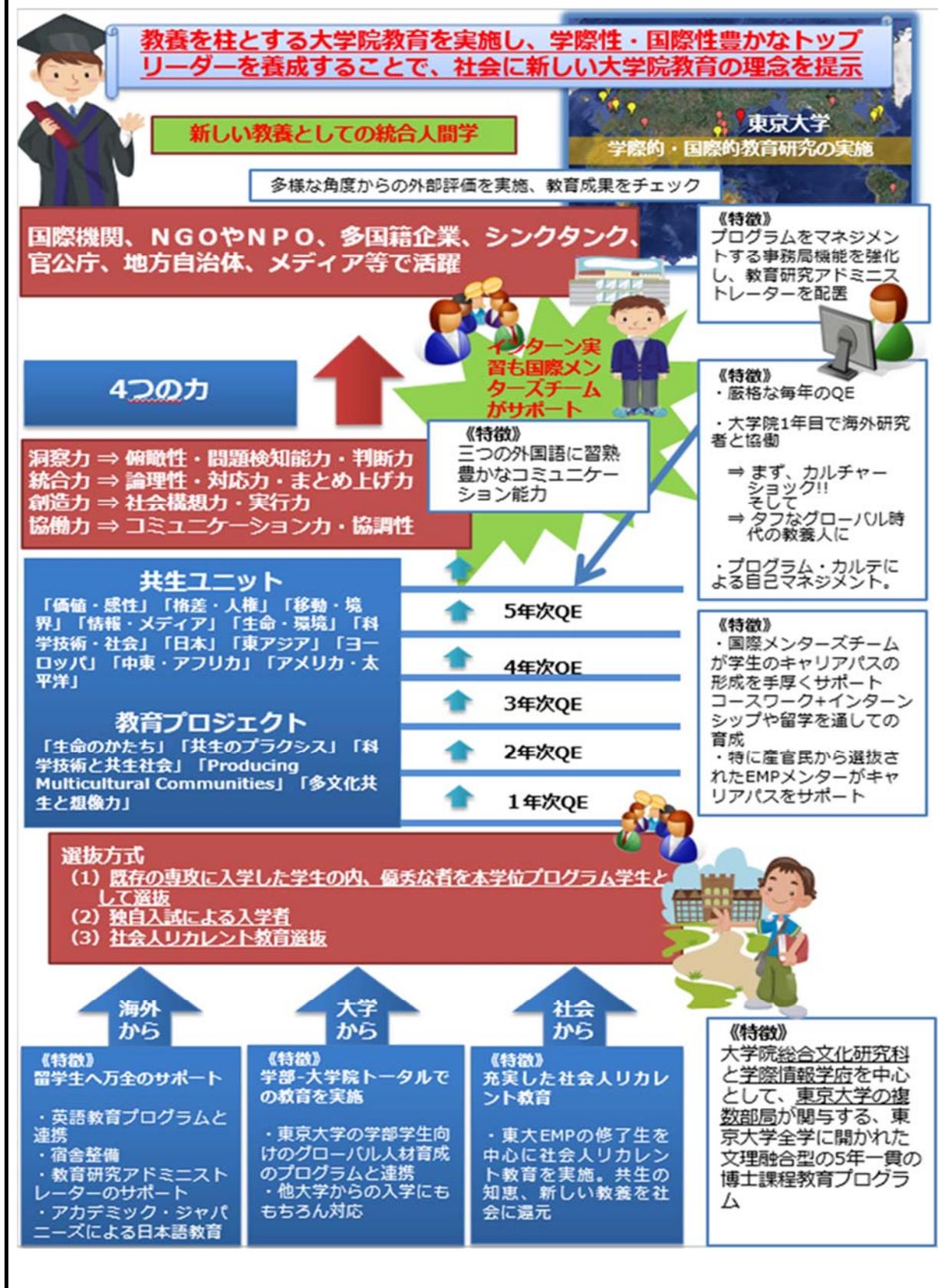
《**修了者に関するキャリアパスの想定、キャリア支援体制の特徴**》**国際メンターズチーム**は、学生一人一人に手厚い研究指導とキャリアパス形成のためのサポートを提供する。**インターンシップ制度**を設け、希望する学生に国連など国際機関、NGOやNPO、企業、シンクタンク、官公庁、地方自治体、**メディア**等における研修の機会を提供する。

《**質保証システム**》プログラム学生への選抜、毎年のQEの実施、目標達成状況を学生自身が記録するプログラム・カルテの運用、論文審査により、学位プログラムの質が保障される。

《**優位性**》学際性、国際性を追求し、官の世界や産業の世界で実践的に多文化共生社会を実現する方途を模索する人材を養成することは、社会的な意義を持つ。さらにアウトカムとして**人文学・社会科学・自然科学の新たな大学院教育の理念である統合人間学を社会に提示**する。

プログラムの概念図

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成する観点から、コースワークや研究室ローテーションなどから研究指導、学位授与に至るプロセスや、産学官等の連携による実践性、国際性ある研究訓練やキャリアパス支援、国内外の優秀な学生を獲得し切磋琢磨させる仕組み、質保証システムなどについて、プログラムの全体像と特徴が分かるようにイメージ図を書いてください。なお、共同実施機関及び連携先機関があるものについては、それらも含めて記入してください。)



プログラムの成果

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成するという観点に照らし、学生や修了者の活躍状況を含め、アピールできる成果について記入してください。)

本プログラムの中核となるのは、産学官、産業界、学術機関、国や自治体のみならず、NGOやNPOなどの民間の組織および市民と協働しうる力の育成である。本プログラムを通して、こうした人材を育成する方法が確立され、成果として目指す人材を育てることができた。

【教育方法の体系的構築】①学術研究と現場体験、②異分野との協働、③学生による主体的活動を充実させ、互いに有機的に結びつく教育方法を構築した。①学術研究と現場体験：本プログラムに最も特徴的なのが教育、福祉、地方創生等多岐にわたる組織や団体と共同して行った多彩な学外研修である。これらの研修に際しては必ず事前学習（文献研究と討論など）を行っている。このほかに学生が単なる研究では決して経験できない現場感覚を身につけていくための学外・学内インターンのシステムを構築した。②異分野との協働および国際性の醸成：「多文化共生」というテーマを掲げている本プログラムではそれぞれの学生が自分とは異なる人たちとの協働を様々な形で実践的に体験している。文系理系の多様な専門を持つ学生がいる本プログラムでは授業や研修での多様な分野の学生間の協働を通して各自が専門の枠を超えた学際性をたえず磨くことができている。プログラム生は東京大学の社会人向け講座であるEMPの修了生によるEMP講義およびEMPメンターのシステムを通して学生たちは助言を受け、ビジネスや行政の最前線に触れ、社会と関わる意識を醸成してきたほか、研修や講演会を通して、様々な学外の個人や組織・団体と関わり、時には協働して活動を行い、研究や大学の在り方を相対化して、社会の中に位置づけられるようになった。プログラム生は国際メンターより留学や進路のアドバイスを受け、海外の多くの大学と交流し、共同でセミナーやシンポジウムを開催し、自らの活動・研究成果を積極的に発信してきた。③学生の主体的活動：本プログラムの独自のシステムとして学生による自主企画がある。分野の異なる学生同士でグループを作り、研修を企画してきた。そこで学生たちは地道な事務作業、書類作成、相手との交渉、全体の調整と統括など、きわめて多くの実践的なスキルを身につけた。

【総合的成果】①多文化共生への理解の深化：研修や自主企画、海外の大学生との交流を通して、学生たちは「多文化」の意味の広がりや各々の立場から深く具体的に理解するようになった。それはたんに日本と外国だけではなく、文系と理系、産業・行政・学術、健常者と障害者、都市と地方、ジェンダー、人間と自然など、多様で至る所にある葛藤と共生の実践である。それを学生たちは各自の専門、それぞれの関心からフォーカスを当てて取り組み、自分の研究にも取り込んできた。②多様なネットワークの形成：様々な個人や組織と協働してきた本プログラムのもう一つの重要な成果は、学生や教員・大学の内外に展開したネットワークである。研修やセミナー等で協働したプログラム生の仲間、NPOやNGOなどの組織、企業や地方の行政機関やコミュニティ、国内外の他大学との間には、今後の教育のために継続的に関わり、協力していけるだけのネットワークが構築できた。

以上の成果として育成された学生たちは、単なるリーダーではない。彼らは異なる分野や組織全体をまとめていくコーディネーターでもあり、その間をつなぎ調整するメディエーターでもあり、さらには目立たないところで活動を裏から支えるサポーターでもある。様々な他者との連携を通して、彼らは自らに期待されることに応える使命感だけでなく、足りないことを学ぶ謙虚さも身につけた。今後産学官民の間で活躍する人材であるためには、こうした人格的な資質も必要であろう。

プログラムの成果

(大学院改革につながる教育研究組織の再編等の学内外への波及効果や課題の発見について記入してください。)

東京大学において、人文学を核とするリーディング大学院プログラムは、この IHS プログラムのみであるが、上記のような成果が大学院改革としてどのようなインパクトをもちうるかについて以下に記しておく。

【学際的な教育の可能性】

文系と理系の学生が共に学ぶことで、学生たちは単に互いの学問領域についての知見を得るだけでなく、自分の専門について誰にでも分かる言葉で語れるようになった。それによって文理の壁は、決して乗り越えがたいものではなく、自然に協働できること、そのことがさらに、双方の研究テーマにも影響を与え、他の分野により開かれたものになった事例も見られた。本プログラムのような試みを続けていけば、学問にも新しい方法や問題を見出し、新たな専門分野を開拓することも十分考えられる。

【社会連携の可能性】

人文学はとかく社会的な意義が低く見られがちであり、昨今の人文学不要論を再燃させている。しかし、本プログラムは、人文学の社会的な意義を学生に対しても、社会に対しても示すことができた。なぜなら社会の問題をより広い文脈の中に位置づけ、その背景や前提にまでさかのぼって考えるには人文的な素養が不可欠であり、したがって根本的な対処がどのようなものなのかを見つけ出す力となるからである。本プログラムの成果は、企業や民間の組織にも、大学の持つポテンシャルを示し、今後の共同の可能性を広げるものと考えられる。

【方法知・高度教養としての統合人間学】

当初不明瞭であった「統合人間学」については、プログラムの進展に伴って、特定の確立した内容をもった学知として構想できるものではなく、方法に関する知、すなわち、様々な問題に取り組む際にどうすればいいのか分かる能力であることが明確になった。具体的に言えば、自らの専門性に軸を置きながら自らの視点・知見から他の専門知・実践知を統合し、駆使していく力である。まさにこのような力こそが、上記の教育方法の体系によって学生たちが習得したものである。学生たちは、たえず自分にとっての「統合人間学」が何かを問うことになる。それは、既成の学問領域がもはや通用せず、現実世界も学問世界も今後たえず変化する情勢のなかで、自らの立ち位置をそのつど決め、社会の問題に他者と協働して取り組む力となるにちがいない。このような力こそが大学院教育において涵養すべき最も重要な能力であることはいうまでもなく、本プログラムで確立された教育方法が今後大学院レベルでの教育改革の際のモデルとなることが期待される。